

月の花挽歌 ～15. 最終章 突然炎のごとく 真紀と麻里子～

15-4

地下蔵で立ったまま時間を要していた辰巳と麻里子が表に出たのは、5時を少し回ったところで薄闇が迫っていた。

人影も途絶えた酒蔵の敷地内にフクロウの“ボボー、と鳴く声が断続的に続いた。

ついさっきまで辰巳と共有した5番蔵での二人きりの小一時間は、麻里子にとって相手との距離感を縮めたばかりでなく、ほのかな恋情を芽生えさせていた。

母屋に向かって麻里子と肩を並べて歩いていた辰巳は足を止めて咳ばらいをすると、夜陰にまぎれて言葉を発した。「初対面だけど愛しています」

辰巳に闇討ちまがいの告白を受けた麻里子は、「会ったばかりですが、私もあなたに恋したようです」と言って怯むことなくユーモアを交えて返した。

麻里子の運転するシビックハイブリッドは戸倉上山田温泉の老舗旅館『笹屋ホテル』の駐車場に停車した。

車から降り立った辰巳は、車中で麻里子から聞いて、イメージしていた通りのホテルの佇まいだと納得した。

辰巳は来る途中でコンビニエンスストアで買った下着を入れたビジネスバッグ一つを提げて、フロントで内容変更のチェックイン手続きを済ませた麻里子についていった。

本館から和風建築の回廊を渡り、ホテルの一角に別棟として建てられた数寄屋造りの8室の内の『桔梗』と名付けられた部屋に通された。

1932年に、旧帝国ホテルを手掛けた建築家・ライトに師事した遠藤新が設計した8室の総称を豊年虫（ほうねんむし）と呼称したのは、志賀直哉が逗留中に執筆した短編小説の『豊年蟲』（カゲロウの事）から由来する。

前室3畳と本間10畳の桔梗には、坪庭が望める源泉100%の石造りの広い内風呂が付いている。

ホテルの支配人も青年会議所のメンバーなので噂話になる心配はあるはずなのに、麻里子は平然としていた。

食事の前に風呂を勧めた麻里子は、辰巳が入浴中を見計らって、東京にいる真紀に今日1日起きた事を有り体に携帯電話で伝えた。

電話を切り、飲みかけのお茶を和テーブルに置いた麻里子は、未知へのドアを開けようとしている自分が自分でない感覚にとらわれていた。